かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

東水島分教会

昭和36年10月26日　瑞和分教会設立
昭和36年11月10日　鎮座祭
昭和36年11月11日　設立奉告祭
昭和37年12月26日　改称（名称重複）

教祖百四十年祭 笠岡大教会活動方針

つながろう、おやさまのお心に。
つなげよう、信仰の喜びを。

活動目標　ひながたを学び、そのお心を実践しよう。

教祖140年祭

立教186年 3月号

直轄委員部長・委員研修会 開催

婦人会

婦人会笠岡支部（上原きよ𠀋支部長）は、去る2月3日、大教会で直轄委員部長・委員研修会を開催、30人が参加した。開講に引き続き坐りづとめをつとめた後、会議室で支部長様より教祖140年祭に向けての活動方針についてお話を頂戴し、『道の子を道の子らしく育てる』ために、会員一人ひとりが信仰的成人を目指そう」とお仕込み頂いた。続いて、班毎に年祭に向かう心持ちを練り合い、それぞれの心定めを書いて胸に治め、昼食後には、この度新たに発表された支部内の役割について、各部署の役目と活動を話し合った。最後は再び神殿にて、よろづよ八首の総立ちと終わりの言葉をもって閉講した。

今回は三年ぶりに終日開催が叶い、また、年祭に向かうこの旬に支部としての新しい枠組みがスタートしたことも併せて、喜びと希望を感じる研修会となった。みちのだいとしての自覚を胸に、まずは直轄委員部長・委員から成人の歩みを進めていきたい。

（常任委員　上原愛美）

熱心に聴き入る委員部長たち

信仰的成人を促す支部長様

新体制に分かれてのねりあい

支部長様の話を受けてふりかえり

冬の運動会 開催

学担

笠岡学生担当委員会（上原繁次委員長）は、2月19日、「冬の運動会」を陶山小学校体育館で開催した。

これは、学生から要望があり初めて開催したもので、24人が参加した。この日はまず、ニュースポーツ「キンボール」をプレーした。チームで協力しながら大きな球をキャッチするという競技に、参加者は大いに盛り上がった。次に、玉入れとダンスが交互におとずれる「ダンシング玉入れ」を実施。最後は、「ソフトミニバレー」を、心行くまで楽しんだ。

参加者は、スポーツを通して親睦を深め、和やかなひとときを過ごした。

（委員長　上原繁次）

盛り上がるダンシング玉入れ

3チームでプレーするキンボール

すがすがしい表情の参加者

白熱のソフトミニバレー

学生層育成者講習会開催

学生担当委員会

笠岡学生担当委員会（上原繁次委員長）は、2月21日、大教会祭典に引き続いて、「学生層育成者講習会」を開催した。講師に、清水慶政先生（本部学生担当委員会委員長・兵神大教会長）を迎え、学生層を育成するに当たっての心構えやポイントなど、体験談を交えた講話があった。

（講話内容は次の通り）

昨年の本部秋季大祭において発布された諭達第四号の中で真柱様は、

「教祖（おやさま）お一人から始まったこの道を、先人（せんじん）はひながたを心の頼りとして懸命（けんめい）に通り、私たちへとつないで下さった。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代（まつだい）へと続く道となるのである。」

とお諭しくださいました。

このように次の世代へと信仰を受け継いでいくことは、私達が常に意識して取り組まなければならない重要な課題だと思います。

しかし、一教会長として申すと、10代や20代の若者にお道の信仰を伝えていくことは、実は非常に難しいことだと感じています。

なぜなら、若者自身が、自分が信仰する必要性・必然性を感じていないと思うからです。例えば、においがけ・おたすけの場面で、自ら信仰を求めている人・助けを求めている人に、この道の信仰や教えを伝えることは、それほど難しいことではないでしょうが、信仰を求めていない人では、なかなか一筋縄ではいかないと思います。お道の若者の多くも、ちょうどそれと似た状況にあると感じています。その上、世間一般でも若者の宗教離れ・信仰離れが顕著になってきているという調査結果もあるようですから、お道の中でも、教会や信仰から離れよう、距離を置こうとする若者が増えてきているような気がします。

そのような状況の中で、若者たちにこの道の信仰のありがたさや喜びを伝え、信仰を受け継いでもらうにはどうしたらいいのか。そこが今、本教の最大の課題ではないかと感じています。

そこで、本日はまず私自身が若者の丹精に関わる中で感じた3つの気付きについて話します。

▼信仰は身近な人の信念で導かれる

まず、以前、教会で預かった2人の女子青年について話します。

1人は部内教会の信者子弟で、就職先で上司からパワハラを受け、その後心身ともにバランスを崩してしまい、人から勧められて教会へきました。

もう1人は教会長子弟で、中学から患っている激痛を伴う難病のため、学校を途中で退学し、人に勧められて教会にきました。

2人とも非常にデリケートで、嫌なことや不都合なことがあるとすぐに自分の殻に閉じこもってしまう。また、悪気はないようですが、都合が悪くなると無意識的に嘘をついてしまう。若い女の子なので、もっぱら妻が相手をしましたが、本当に手をやいていました。

まず、第一に約束が守れない。身上で調子の悪い時は仕方ありませんが、調子のいい時でも簡単な約束が守れない。また、お道の教えや信仰の話をいくらしても、生活態度や言動は全く変わらず、少しも前に進もうとしない彼女達に対して、妻は何度も心が折れそうになりました。そんな妻を思いやる余裕もなく、段々と教会の生活にも慣れてきた彼女たちは、なお一層わがままになり、私たち夫婦は、これ以上、教会に置いても何にもならないから、もう家に帰そうかとも相談しました。

しかし、それでも妻は教祖のひながたを心の支えに諦めずに根気良く接し続け、2年目に入った頃、私達はある作戦を思いつきました。名付けて「ソフトクリーム大作戦」。これからは買い物でも届け物でも、彼女たちを連れ回し、とにかく一緒にソフトクリームを食べ、こちらの懐に入れてコミュニケーションを図るという作戦です。

これを、妻が素直に、頑張って実践してくれました。すると、心の距離がどんどん縮まり、段々と、彼女たちの心の内の本音が聞けるようになり、私たちの話を聞く態度も少しずつ変わってきました。

劇的に変わったわけではありませんが、私たちの目標は、彼女たちがとにかく自分自身の足で立ってちゃんと自分の人生を歩めるようになってくれることでしたので、来た頃よりは少し成

長して明るい笑顔で教会を巣立った姿を見て、心から安堵しました。

そんな彼女たちが妻に送った感謝の手紙には、「いつか奥様みたいなかっこいい女性になりたい。」と書いてあり、どこがかっこいいのかを尋ねると、「神様を心から信じていて、ぶれないところ」とのこと。おそらく、彼女たちの目にする私の妻の姿は――彼女たちが寝込むたび部屋にやってきて、おさづけを取り次いで諄々と神様の話を取り次ぐ、若い彼女たちにとってはちょっとうざい存在だったのではないか。おぢばでお届け物に回る姿。本部の神殿や教組殿を真剣に拝する姿。できればまだ誰にも売っていないお初のものを教祖殿にお供えしたいとデパートの店員に事情を話して皆で探し回る姿。――ちょっと異常な、変人的な姿だったのではないかと思います。それを間近で見ていて「神様を心から信じていて、ぶれないところがかっこいい」と言うのですから、同じ信仰者として羨ましく思います。

しかしながら、それは、何度も心が折れそうになりながらも、何とか少しでも親神様・教祖のご存在とその親心を伝えたいと、教祖のひながたを心の支えに諦めずに根気よく接し続けた妻の信仰信念が、彼女たちの心に刺さったからではないかと感じています。

1年後、彼女たちに再会すると、信者子弟の子は無事に就職が決まり、忙しくも充実した毎日を過ごせているとのこと。難病の子も、病気と付き合いながら、元気にアルバイト生活を送っているとのことです。

その後の生き方に劇的な変化はありませんでしたが、無事に社会復帰を遂げ、今でも女子青年活動には時間があれば自発的に参加しています。信仰信念と呼べるようなものはまだないかもしれません。また、神様を求める気持ちもそれほど強いものではないかもしれませんが、それでも彼女たちの心の向きだけは少しだけ神様の方向へと向けることができた、このまま進んでいけば、いつの日か自ら信仰を求めてくれると感じています。

私自身も、そういう「人の信念」によって導かれた経験があります。15年以上も前のこと、本部青年をしていた時、ある本部員先生が私たち青年に対して、「最近、本部へ参拝に来る人を見てると、神殿には参拝に来るが、神殿から教祖殿を遥拝で済ます人が多い。教祖は親やから、子供の顔を見るのを楽しみに首を長くして待っていてくださるのに、こんなに近くまで来て顔を見せずに帰るなんて、水臭い親不孝なことしとったらあかん。」というようなことを話されました。

先生の「水臭い」という言葉を聞いて、なるほどと思いました。また、その先生の「教祖は親なんや、ご存命でそこにおられるんや。」という、ご存命の教祖を想う信仰信念が、私の心に突き刺さったような気がしました。それ以来、私たち夫婦も可能な限り教祖殿に足を運んでいます。

また、学修などの機会に関わったスタッフに、この話を伝え、期間中はできるだけ教祖殿へ足を運ぼうと申し合わせています。後日、スタッフを勤めてくれたある若い教会長さんから「先生に言われて、できるだけ教祖殿に足を運ぼうと意識するようになってから、自分の信仰が少し変わってきたような気がします。」という嬉しい声がありました。

このように、お道の信仰というものは、誰かの信念によって導かれる部分が少なくないように私は感じています。特に、この道の信仰の喜びを伝えていく上では、先に道を歩んでいる私たちの普段の言動が、若者達に希望を与えたり、あるいは失望を与えたりしてしまっている部分があると感じています。

教会の青年さんや若い人たちに、身近で尊敬できる人がいるかと尋ねてみると、尊敬している人の名前を答えてくれるますが、結構な割合で、「あの先生が誰かのことを悪く言っているのを聞いたことがない／いつも自分から率先してひのきしんをしていてすごいと思う／いつもニコニコしていてとても癒される」というような答えが返ってきます。私は少し意外に感じました。「あの先生のおたすけはすごい／通り方はものすごい／お話が最高だ」というような感想が返ってくると思っていましたので。若者の心を動かす信念と言っても、何も大層なことばかりではなくて、日々の生活の中の何気ない言動が若者たちの心に写っていくものなのだなと感じました。ですから、私たちお道の大人は、できるだけ日頃から若者の手本になるような信念のある言動を心がけ、その信念を映していきたいものと感じています。

▼信仰は節の中で育つ

以前、青年として伏せ込んでいた部内教会の後継者の話ですが、彼は非常に学業優秀で、有名国立大学から大学院へと進んで経済学を学び、卒業後は外資系の一流企業に就職、まさに順風満帆エリートコースを驀進（ばくしん）中でした。しかしある日、結婚を考えていた彼女の両親に結婚を申し入れたところ、両親が天理教が大嫌いで、ましてや天理教の教会に嫁ぐなんてあり得ない、絶対に許さないとのことで、猛烈に反対されました。彼は必死で説得を試みましたが、受け入れてはもらえず、「自分が天理教をやめればいいのだろうか」とまで考えたそうです。しかし、天理教を信仰しているというだけで結婚を反対されていることに、段々と自分自身のアイデンティティを否定されているような気持ちになってきて、色々と悩んだ末に結局その彼女とは別れることとなり、それを機に自分自身のアイデンティティについて深く考えるに至りました。自分は天理教を選んだのだからと、失恋を機に仕事もきっぱりとやめ、ある日、所属教会長である母親とともに大教会で伏せ込みがしたいと申し出てきました。私は突然のことにびっくりしましたが、親神様・教祖の鮮やかなお手引きを感じました。実はそこに至るまでの経緯があり、教会長をしていた彼の父親は、彼が大学院在学中に、進行性の胃がんで、半年ぐらいであっという間に出直してしまい、その間、おたすけに伺っていた私も非常に落ち込みました。葬式後、改めて五十日祭・合祀祭をお伝えした時に、彼が言うには、「亡父が『もしも自分が出直したら、あとのことは何でも大教会長さんに相談するように。あの人はきっとお前の話を親身になって聞いてくれる。お前の気持ちをきっとわかってくれる人だから、何でも相談したらいい。』と言っていたので、今後の自分の進路について相談したい。」とのこと。それを知った私も、いろんな思いが込み上げて目頭が熱くなりました。そこで彼が言うには、「自分は就職がしたい。教会の後継についても今はわからないし、約束もできない。」とのことで、私も予想していたので、特に動揺はしませんでしたが、私から「30歳までに、必ず、教会を後継するかどうかの結論を出すこと。後継するなら、仕事を辞めて3年間大教会に伏せ込むこと。」という2つの条件を出しました。さらに続けて、「我々教会長は、この道のプロとして志を持って会長という御用をつとめている。だから、この教会長という立場を舐めてもらったら困る。もしもプロとしてつとめる志が持てないのならば、他の仕事を選んだらいい。」と、私自身の信念を伝え、就職を認めました。

ひょっとしたら亡くなった会長さんはずっこけたかもしれません。大教会長が止めてくれると思ったのに、すんなり許してしまったので。でも、それは私の偽らざる信念でしたし、覚悟でもありました。その後亡くなった会長さんの奥さんが教会長となり、その会長さんが一心不乱に教会長の務めを果たそうと奮闘してくれたものですから、その母親を支えようと家族の皆が力を合わせて教会を盛り立ててくれました。上級会長である私の目から見ても、かつてないほど家族が一丸となって信仰に向き合ってくれた日々であり、その子供たちも随分と成人してくれたように思います。そうした中に先ほどの長男の節が上がってきたのです。

その後、大教会で伏せ込むようになった彼は、自分は一流企業を捨ててこの道を志したのだから、必ず一流の教会長になると公言し、修行僧のように伏せ込み、寝る間を惜しんで教理の習得につとめました。そして自ら志願して布教の家に入寮し、その後残って、今は単独布教師となり、日々おたすけに真実を尽くしています。こうした結構な姿をお見せいただいたのも、彼の両親を始め、周りの人々の願いが彼を導いた結果だと思いますし、彼自身が逃げずに節に向き合ったことで、この節を通して大きくお育ていただいた結果だと思っています。

また、おぢばの高校を卒業して、

自らの体験談を交えてお話下さる清水先生

歳の時に大教会にきた20歳の女子青年の話ですが、彼女は幼い頃からお道の信仰の中で育ち、おぢばの高校へ進みましたが、卒業後、友達のほとんどが就職や進学など自分の好きな道へ進んで、自分だけが信仰に縛られて道を閉ざされたような気がして、どこか納得がいかないようなもやもやしたものを抱えていて、信仰には前向きになれずにいました。例によって妻が世話取りに当たり、毎日、向き合って話を聞き、談じ合い、お道の教えを根気よく伝えていましたが、頭では分かっていても、なかなか神様の存在を掴むことができず、伏せ込みにも身が入らない状態が続きました。

1年以上経ったある日、私が本部の神殿当番をしていると、妻から連絡があり、「お腹が猛烈に痛むので、何か思い当たることがあればお諭しを」とのこと。私には何も思い浮かばず、とにかく親神様・教祖に願うだけでした。夕勤め直前にいよいよ耐え難い痛みになったので、電話でその女子青年を自室に呼び出して、おさづけを取り次いでもらいました。その数日前に、神様をどうしても心から信じることができないその女子青年に対して、私の妻は、「神様のご存在とお働きを心から信じられるようになるためには、この人を助けてもらうためなら何でもしますというくらいの真剣なお願いをして、神様のお働きをお見せいただくしかないと思うよ。そういう節に出合わない限り無理かもしれないね。」という話をしていたらしく、まさに彼女にとってその瞬間が訪れたわけです。「30分以内に御守護いただけるよう、仕切ってお願いしてほしい」と頼み、おさづけを取り次いでもらいました。その後、彼女は、夕勤めのために神殿に向かいましたが、ちょうど30分ほど経った頃、妻のお腹の痛みが嘘のように消え去り、ようやく体を動かせるようになりました。すぐさまそのことを彼女に伝えると、「奥様本当にありがとうございました。とてもありがたい経験をさせていただきました。夕勤めの時、初めて親神様・教祖におすがりしながらおつとめをさせていただいて、改めて私がいかに毎日何も考えずにおつとめをしてしまっているかを、とても感じて反省しました。さっき奥様から連絡が来た時、本当に親神様・教祖にありがとうございますとお礼をさせていただきました。この気持ちが今日だけのものになってしまう自分なので、少しでもこの気持ちを忘れないように通らせていただきたいです。ありがとうございました。」と。次の日に妻と会った彼女は、「こんなにも誰かのために必死で神様にお願いをしたのは生まれて初めてかもしれません。私がこんなことを言うのはおこがましいと思うんですけど、きっと奥様は私のために痛んでくださったのだと思います。」と嬉しそうに話をしてくれたそうです。

教祖のおそばでお仕えしていた高弟の先生が、「天理王命の姿があるか。と尋ねられますが、いかが答えてよろしゅうございますか。」とお伺いしたところ、教祖は「あるといえばある。ないといえばない。願う心の誠から見える利益が神の姿やで。」と仰ったそうです。親神様も教祖も、私たちは、そのお姿を目に見ることはできませんから、その御存在とお働きを信じようとしない人にとっては、「神様はいない」ということになるのかもしれません。しかし、私たちが誠真実の心を尽くして願えば、親神様・教祖がその心を受け取って何らかのお働きをお示しくださいます。そのお働きの姿こそが、親神様・教祖の御存在の痕跡であり、御存在の証なのだと教えてくださったお話だと思います。

このお言葉のように、私たちは願うことによって親神様のお働きをお見せいただけるからこそ、その御存在を信じることが出来るのだと思います。教祖は「願う心の誠から見える利益が神の姿やで。」と仰せられますが、この初めてのおたすけという節を通して、彼女は親神様・教祖のご存在とお働きを鮮やかに感じることが出来たのだと思います。

よく「身上・事情は道の花」と言われますが、私たちの信仰は、こうした身上・事情といった節の中でこそ育ち、深まると感じます。そして、若者がそうした節に直面した時、信頼して相談できる相手がいるか、支えてくれる仲間がいるか。また拠って立つべき信仰があるかということが、非常に大事な要素になってくると思います。私たち大人が若者のそうした大切な節に寄り添える存在であれるように努力していきたいものです。

▼仲間や思い出が信仰をつなぐ

冒頭にも申しましたが、若者にこの

お道の信仰を伝えていくということは、非常に難しいことだと思います。10代・20代という若い時期は社会的な責任も比較的軽いし、どうしても守らないとならないというものもそれほど多くありませんから、ある意味でとても身軽な立場です。身軽だからこそ、若いうちの挫折や失敗はそれほど痛手にはなりませんし、やり直しがきくと思います。ですから若い内は多少しんどいことはあっても、神様におすがりしなければならないほど頭を抱えるようなことはあまりないでしょうし、神様に願ったり、信仰にすがったりするような必要性があまり感じられないというのも、無理もないことなのかなと思います。

しかし、30代・40代になって家庭を持ち、仕事上の責任も増してくれば、難しい悩みや思わず頭を抱えたくなるような大節に直面する場面があるように思います。そんな時、「おぢばや教会に繋いでくれる」仲間がいたり、思い出があったり、あるいは親身に導いてくれる人の存在があれば、その若者はきっと節から芽が出る御守護をお見せいただけるに違いないと感じます。

しかし、逆にいくら立派な教会に生まれ育っても、今は仕事や遊びで頭がいっぱいだから信仰どころではないとはねつけるような子もいますが、そこが重大な運命の別れ道になってくると思います。

だからこそ、いつの日か自分自身で信仰の必要性を感じたり、自ら教えを求めたりしてくれるその日まで、つまり旬が訪れるその日まで信仰を大事に繋いでおくということがとても大切になってくると思います。

では、その信仰を繋ぐためにはどうしたらいいのでしょうか。実はそこに皆一番頭を悩めているのだと思います。私はその信仰をつなぐ上で大きな役割を果たしてくれるのが、同じ信仰を持つ同世代の仲間であり、仲間達との思い出だと思います。

お道の学生は自分の立場や進路に意外と悩みや不安を抱えています。また誰かに聞いてほしい愚痴があります。だからこそ、悩みや不安を共有できる仲間の存在を欲しています。ここにおられる皆さんも、若い頃は実はそうだったのではないかと思います。

学生会の活動やおぢばでの行事は、表向きは教理や信仰を学ぶ場として開催していますが、もう1つの役割として、共に道を歩む仲間や先輩と出会う場であり、同じ道を歩む仲間と過ごした思い出を作る場所だと思います。そういう意味で言えば、各教会の鼓笛隊や少年ひのきしん隊、学生会活動や親里で学ぶことも同じ事が言えるかもしれません。

そういう場所でかけがえのない仲間と忘れられない思い出があるからこそ、多少しんどいことや嫌なことがあっても、このお道に繋がっていられるのだと思います。

何度も言いますが、10代や20代の若者に信仰を伝えていくということはとても難しいことだと思います。だからこそ、旬が訪れるまで何とかしてちゃんと繋いでおかなければなりません。

そういった意味でおぢばで行われる学修や春の学生おぢばがえり、少年ひのきしん隊、また各教会で行われる鼓笛隊活動や育成練成会という場所は、若者に信仰を伝えていく上でなくてはならない場所だと思います。学生にとって塾や部活は大事なことですが、道を伝えていくためには、そういったお道の行事に一度でも多く参加させて、仲間や仲間との思い出を作らせることが、今私たちにできる一番重要な丹精になるかもしれません。

最近は、長引くコロナ禍の影響で私たちが当たり前のように経験してきた楽しい様々な行事も十分な形では行うことができず、おそらく仲間や思い出もなかなか作りづらい状況にあると思います。しかし、彼らの信仰を繋いでおくためには、同じ信仰を持つ同世代の仲間や先輩と出会う機会が必要であり、仲間達との思い出が必要だと思います。

ですから、今後は、本部も、直属・教区でも、みんなで一生懸命考えて、これまで以上に学生や若者が共にお道を歩む仲間や先輩と出会える場所を、どんどん増やし提供していかなければならないと思います。

ここまで、私の気付き、「信仰は身近な人の信念によって導かれる」・「進行は節の中で育つ」・「仲間と思い出が信仰を繋いでくれる」というこの3つの気付きについてお話ししましたが、最後に、先生方にお願いしたいのは、若者を丹精する上では、若者にどう育ってもらいたいのかという明確な願いや、期待を持って接していただきたいということです。

皆さんはご自分のお子さんやお孫さんに対して、将来、信仰的にどうなってもらいたいとお考えでしょうか。

例えば、教会の長男なら教会を継いでもらいたい。長男以外なら自発的にひのきしんやおつとめをつとめて、教会を支える人に成人してもらいたい。教会長や布教師になって、バリバリとにをいがけ・おたすけに回るようなおたすけ人に育ってもらいたいという期待をかけておられる方もあるでしょう。

私の場合、若い人には、親神様・教祖の御存在とお働きを心から信じられるような人、御恩報じの出来る人になってもらいたいと願っています。

もちろん、本人や親の考え方・立場・状況によって違うでしょうから、どれが正解ということは無いと思いますが、どういう願いにせよ、その子に将来どうなってもらいたいのかを、一度ちゃんと整理して考えをまとめておく必要があると思います。

もしもそういった思いをちゃんと持っていないなら、「無い思い」が相手に伝わることもありません。ですから、若者の丹精にあたる上で、まず第一に皆様にお願いしたいことは、若者達に「どうなってもらいたい」という明確な願いを持って接するということ。そして、その思いを強く持ち続けて、願い続けていただきたい。

更には、子供に期待をかけて育てることも大切だと思います。私は、小さい頃から母に、曾祖父の生まれ変わりと言われて育ち立派だった曾祖父に負けないぐらい立派な人に育てと、非常に厳しく仕込まれました。曾祖父の生まれ変わりと言われることは子供心にも誇らしく、なんとかその期待に応えようという使命感のようなものが芽生えていたように思います。兄弟もそれぞれに誰々の生まれ変わりと聞かされて育ち、それがプレッシャーになってしまうこともあると思いますが、子供に期待をかけて育てるということは、実はとても大事な要素だと思います。

このように若者の丹精の上では、若者にどう育ってもらいたいのか、という明確な願いや、期待を持って接するということが意外と大事なことだと私は考えています。

そして、その思いをちゃんと相手に伝えることも大事なことです。

数年前、学担の集まりで、表統領先生が、ご自身がお道に対して斜に構えておられた若い頃に、お道から離れていこうとする若い本人達にすれば、「ものを言わない背中」など見るはずがない。そればかりか、「自分は信仰の道を通ることを親から一言も言われたこともない」という理屈を与えてしまっているようなものだ」というようなお話をされました。

「ものを言わない背中」という表現がとても印象的でしたが、確かに、若い人たちと話すと、意外と「お道を通って欲しい」という親の思いを聞いたことがないということを耳にします。

「長男だからしっかりしろ／お前達、兄弟で教会を守っていてほしい」とは言われたが、「教会を継いでほしい／お前が後継者だ」とは言われなかったから、「兄弟の誰かが教会を継ぐのかな」と言うのですが、大体そういう教会はなかなか後継者が定まりません。

親からすれば、お道の信仰を受け継いでほしい、教会を継いで欲しいと思っているとは思いますが、きちんと相手に向き合ってその思いを伝えないから、お互いの気持ちが噛み合っていかないのだと思います。

ですから、是非若い人たちに向き合って、きちんと親の思いを伝えていただきたい。そして、良い意味での期待をかけてやっていただきたいのです。

若者は親の言葉を何でも聞き流しているようでいて、実はちゃんと聞いていますし、ちゃんと心の中に残っているものだと思います。しかしその時は、自分にとってそのことが都合が悪いことなので、なんとなく聞き流して無視しているように見えますが、しかし言われたことはちゃんと聞こえているし、胸にも残っていると思います。

そして、先ほどの私の部内の後継者のように、何か人生の重要なターニングポイントを迎えた時、その親の言葉や期待が、ふと浮かび上がってくる。そういうことがあると思います。

「信仰しなさい」という命令ではなく、「信仰しなければならない」という強制でもなく、「信仰してほしい」という親の真っ直ぐな願いだけが、若者の心に届くメッセージになるのだと思います。

もちろん、期待に応えてくれる若者ばかりではないとは思いますが、諦めずに願い続けるところにこそ、親神様・教祖のお導きがあると思いますので、

ぜひ、若者の丹精の第一歩として、全ての道の大人が、皆で心掛けていきたいと思います。

最後に、現在、学担では、基本方針として、「教祖を慕い、ひながたを辿る喜びを共に味わおう」というスローガンのもと活動をしています。学生層育成の御用に携わる私たちは、この教祖年祭を成人の節目として、教祖のひながたを道標に、陽気暮らしに向かうこの道を、学生と一緒に共に歩んでいきたいと考えています。

そのためには、まずは私たち自身がひながたを学び、そしてそれを辿る中に信仰の喜びを自ら味わって成人の歩みを進めていくこと。そしてその中で若者たちに声をかけ、ふれあいながら、同じ道を歩む仲間として一緒に信仰の喜びを味わいたい、分かち合いたい、共に歩んでいきたい。そういった学担側の決意を方針にしました。

まずは学生の丹精を担う私たちが、学生たちの良き仲間となり、共に過ごした思い出を作っていきたいと思います。そしてできれば、わずかばかりでも信仰信念を映していくことが出来ればと思っています。更にはいつの日か旬が訪れて、身上や事情といった節と向き合わなければならなくなった時、そばで支えてあげられるような存在となれるよう、普段から自身の丹精をを重ねていきたいと考えています。

しかしながら、道の若者の育成は学担だけが頑張れば良いというものではありません。本来、若者の丹精は、やはり縦や教会における日常の丹精がなくては、本当の成果は得られないと思います。

ですから、是非、お子さんや身近な子供に対しては、将来どうなってもらいたいのかという明確な願いを持って接し、諦めずに強く願い続けていただきたい。更には若い人達に向き合って、きちんと親の思いを伝え、いい意味での期待を掛けていただきたい。

また、おぢばや教会で行われる行事には、期待を込めて背中を押して送り出していただきたい。

そうしたことを、お道の全ての大人が皆で心掛けていけば、今よりもお道の将来は明るくなっていくに違いないと思います。

来たるべき教祖140年祭の旬に向かって、お道の将来を担う子供たちの丹精にも精一杯の心を尽くすことを共々にお誓いして、本日の私の話の締めくくります。

《以上要約》

二月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます
親神様の子供かわいい一条の親心溢れるご守護とお導きを頂いて日々は結構にお連れ通り下さいます事は 誠に有難く句体ない極みでございます 私共は日々朝夕に御礼申し上げ自らの心の埃を払いつつ お教え頂く御教えを一人でも多くの人に伝えようとたすけ一条の御用の上に努め励ませて頂いております
その中にも今日の吉日はこれの笠岡にお許し下さいました御祭日でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて 二月の月次祭を執り行わせて頂きます 御前には寒さ厳しき中も厭いませず 今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供たちが 相共にお歌を唱和し 日頃の御高恩に改めて御礼申し上げ 一心に親心にお凭れする皆の誠真実の状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて先月の直轄教会への一斉巡数に続き 今月は部内教会へと一斉巡教を行い諭達の徹底を図らせて頂きました 来月も引き続き部内教会への一斉巡教を行います また本日は祭典に引き続き学生層育成者講習会を開催致します 三年千日の年祭活動期間の時旬に 学生層育成の上にお聞かせ頂く先生のお話をしっかりと胸に治め 学生にも年祭活動を通して成人の歩みを進めて貰うことができるように 努め励ませて頂く所存でございます
何卒親神様には 諭達に込められた親の思いを真摯に受け止め 素直に実践する皆の誠真実の心をお受取り下さいまして よろづたすけの上に尚も自由のご守護を賜り 人々の心がたすけ一条に目覚めて お望み下さる陽気づくめの世の状に一日も早く建て替わりますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百八十六年 二月月次祭 祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	中村道徳
	森本忠善

講話	学生層育成者講習会

賛者	高木昭祥
	三代温生
指図方	上原志郎

四月講話	田林久嗣

役割／区分	坐り勤	前半	後半
地方	吉岡壽	門脇元教	田中隆之
	谷内伸自	横山逸郎	中村道徳
	佐藤真孝	上原繁次	淺野明教
おつとめをどり	大教会長様	上原志郎	岡﨑真一
	前会長様	今川昌彦	上原浩
	上原繁道	山野弘実	武内清明
	大教会奥様	武内正美	門脇加津
	前奥様	山野なつ	室悦子
	田中ますみ	田中つかさ	上原千枝子
笛	吉岡誠一郎	森本忠善	杉原善朗
ちゃんぽん	佐藤道孝	山田敏教	赤木素志
拍子木	三島渉	三代温生	渡邉隆夫
太鼓	中村剛	内海史郎	高木昭祥
すりがね	岡﨑治喜	中村義太郎	横山逸郎
小鼓	中島誠治	岡田誠	虫明立生
琴	上原順子	岡﨑豊子	中村初美
三味線	佐藤香苗	谷内美知子	笹尾一美
胡弓	今川佐智子	三島照美	吉岡八恵

立教186年　部内一斉巡教表

教会名	巡教月日	巡教員	教会名	巡教月日	巡教員	教会名	巡教月日	巡教員
廣町	2月13日	大教会長様	御野	2月 8日	佐藤真孝	多古浦	2月13日	中島誠治
福廣	2月 7日	岡﨑真一	香地華	2月 9日	岡﨑真一	瑞北	3月 9日	上原繁道
福勇	2月11日	大教会長様	真金	3月11日	虫明立生	雲東	2月11日	山野弘実
福芦	2月 9日	森本忠善	稲倉	2月13日	上原繁道	神村	2月10日	森本忠善
福満	2月 8日	門脇元教	稲瀬	2月 5日	今川昌彦	呉中	3月 8日	吉岡誠一郎
福岩	3月12日	武内正美	稲讃	2月10日	門脇元教	大江橋	2月 5日	大教会長様
西村	3月10日	横山逸郎	門司港	3月12日	吉岡誠一郎	品治	2月 7日	森本忠善
福年	2月 7日	上原志郎	大惠山	2月12日	門脇元教	久福	2月 8日	田中隆之
引野	2月 6日	岡﨑真一	東水島	2月10日	大教会長様	呉福	2月 5日	森本忠善
福昭	2月11日	門脇元教	髙児島	2月 5日	杉原善朗	鶴眞	2月10日	虫明立生
福春	3月 5日	虫明立生	高丸	2月 6日	前会長様	川島郷	2月10日	上原繁次
福冨士	3月10日	上原繁道	出雲	2月11日	武内正美	作備	3月 6日	田林久嗣
福東	3月 9日	横山逸郎	瑞雲	2月 6日	大教会長様	錦ヶ原	2月 3日	山野弘実
東福山	2月 6日	今川昌彦	海潮川	2月 8日	横山逸郎	眞府	2月 9日	大教会長様
福南	2月13日	上原志郎	錦洋	2月14日	中島誠治	吉舎	2月 4日	虫明立生
福節	2月 8日	中島誠治	米府	2月15日	上原繁道	上小畠	2月10日	横山逸郎
福輝	2月13日	佐藤真孝	弓ヶ濱	(2月15日)	米府と合同	木津和	2月 6日	上原繁次
坪生	3月 5日	上原浩	西伯	3月 9日	中村道德	國須	2月 7日	大教会長様
八尋	2月10日	田中隆之	米美	3月 5日	大教会長様	上吉野	2月12日	横山逸郎
深安	2月 6日	田中隆之	伯仙	(2月15日)	米府と合同	上備	2月 8日	杉原善朗
芦品	2月13日	門脇元教	照雲	3月 6日	上原志郎	河佐	3月 4日	大教会長様
安那	3月 8日	上原繁次	松都	3月 7日	上原志郎	上川邊	2月12日	田中隆之
芦田川	2月 3日	上原繁次	樺島	5月 3日	門脇元教	甲井	2月 3日	中島誠治
三郡	2月10日	今川昌彦	新輝豊	2月 3日	前会長様	上父	2月 7日	今川昌彦
芦常	2月 5日	田中隆之	亀田山	2月12日	武内正美	宇津戸	2月 5日	佐藤真孝
芦加茂	2月 6日	中村道德	出雲川津	3月10日	中村道德	府世原	2月12日	今川昌彦
惠陽	2月14日	佐藤真孝	天場山	3月 8日	上原繁道	神驛	2月 5日	山野弘実
陽實	2月12日	森本忠善	簸ノ川	2月10日	山野弘実	葦沼	3月 7日	田林久嗣

訃報

中村満子さん

大教会おつとめ奉仕人
久松分教会前会長夫人
3月8日出直されました。
享年　77才

明日につながる 学生WEBSITE Happist

https://happist.net

■お道の教えや心にグッとくるお話をご紹介
■おぢばの行事情報や各地の学生会情報も充実
■「Happistスマイル」では学生の笑顔をお届け

学生に手渡しできるリーフレット
HAPPIST［NOT］NET
ハッピスト　ノット　ネット

ご要望の方は学生担当委員会まで。

よりみち

いつもいつもお世話になっています。教祖140年祭を迎えるに当たり「諭達第四号」が発布され、すでに150日余りの時が過ぎてしまいました。

10年前、教祖130年祭の三年千日活動を始動し始めた頃のことです。

ある信者さんとの何げない会話の中で「会長さん。弟さんを某大学病院で見かけた」との話を聞きました。何となく気になるため弟に電話をしました。通院していた病院で病状説明を聞き、妻の運転する車の後部座席で横になっているのとのことでした。本人から返って来た言葉は「もういけんのでー」の一言でした。後は言葉もなく、かなり落ち込んでいる様子が感じられました。命にかかわる大病が発覚したのです。

振り返れば年祭活動の10年間、3年ごとに病状の悪化など危険な状況が起こりました。

昨年の1月頃、病院から病状説明のため来院して欲しいとの連絡がありました。主治医から「当病院ではこれ以上、治せる治療がないので、家の近くの病院を探して下さい」と言われたそうです。本人はこの病院で治療をして頂きたいとお願いしたのですが、転院せざるをえませんでした。

自宅の近所の病院に20日間入院しました。そして退院後は自宅で療養しました。

退院後、400日余りが過ぎました。不思議なことに、大病をかかえながらも教会への日参、月次祭のつとめ、お供えをはじめ仕事、家庭のことも怠ることなくつとめ、現在、教会には無くてはならぬ存在で、勇んで頑張ってくれています。

教祖130年祭がつとめられる2年前「年祭の三年千日は助かる旬です」という言葉を思い出します。

弟の身上を通してまず私から、どんな身上、事情をみせられても「〇〇、でも〇〇しよう」と落ち込むのではなく、喜びの思いに変えて通らせて頂こうと思っています。

これを読まれる頃は、年祭をあと700日位で迎える時かと思います。重復になりますが、「年祭の三年千日は助かる旬ですよ」。

（と）

詰所からのお願い

詰所での宿泊・喫食について

・詰所で宿泊・喫食される場合は、「教会名・代表者名・泊数・食数」を、2日前までには、必ず詰所へご連絡ください。

・食事をしない（宿泊のみの）場合でも、2日前には申し込みをして下さるようお願い致します。

部内教会・信者に徹底願います。